

詩

よしだ となつ
吉田 常夏

下関市・山口市
(1889～1938)



【著作】

『朱唇秘抄』（大正7・三陽堂書店）
『勅撰八代恋歌集』（大正7・東雲堂）
復刻版『料理小説集』（平成7・三陽堂・吉田静代刊）ほか

【関連情報】

『燭台』全二十四冊は下関市立中央図書館収蔵

若き日、常夏は東都において河井醉茗門下の新進詩人、いわゆる文庫派のひとりとして将来を嘱目されたが処女詩集の原稿を火事で焼き、あまつさえ失恋し青春の挫折感に苦しんだ。自殺しようとしたとも伝えられる。しかし、立ち直って大正のはじめころより方向転換し、ジャーナリストになる。雑誌や新聞に文筆をふるう。夫人の松井静代と結ばれ幸福な時代を迎える。静代夫人は婦人記者として令名高く、一方作家としても『青轡』に作品を発表している。二人の間に三児あり。

大正十二年（一九二三）九月一日の関東大震災にあい、運命が一転する。招かれて帰郷、下関にあった『関門日日新聞』の社会部長・文芸部長となる。だが、日頃の酒がたたったのか、昭和二年（一九二七）春の先帝祭の日に社の編集室で執務中、突然脳溢血の発作が起き倒れる。時に三十八歳。

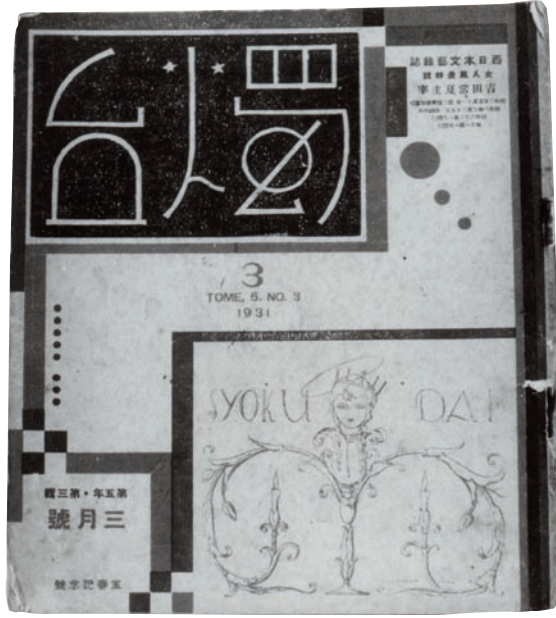
だが、一命をとりとめた。そこへ脇坂開介・野村浩司という二人の文学青年が現れる。雑誌を出したいという。常夏は無謀と押しとどめようとするがきかず、遂に新誌発行となる。『燭台』と命名。

書店におろした誌代を集金人に持ち逃げされるというアクシデントなどはあったが、発行されるや大変な人気で、後の火野葦平をはじめ、九州一円や山口県内から先輩後輩の別なく文学愛好家が集まった。中央からも昔の顔で有名な作家・詩人の作品が寄せられた。

昭和二年（一九二七）十月号から数え、一次二次三次と起伏があり、昭和七年（一九三二）七月再生号まで二十四冊発行され、『燭台』は華麗な幕を閉じた。最初は脇坂が発行人となっていたが、実質は吉田常夏主宰であった。

なお、吉田常夏や『燭台』を研究するには、下関市立図書館が全巻をそろえ、また追悼号としては『詩園』（昭和十四年（一九三九）一月二十五日、第二卷第二号）、『下関・総合文化』（昭和三十六年（一九六一）六月十日、創刊号）。また未刊のものに稿本『燭台・常夏・下関』吉田静代・吉田生緒記がある。

（文・和田 健）



『燭台』（後期）



『燭台』創刊号

母よ妻よ子よ

髭剃ると剃刃出せば
わが妻の奪ひかくしぬ
これしきの病ひに貧に
かるがるとなじかは死なめ

指輪の数の減るとても
妻よ嘆かふことなかれ
眞實まことのわが涙
玉と涙がむ汝が指に

（中略）

母親に先立つ不孝
それゆゑにわれは死に得じ
子供らを残すなげかひ
それゆゑにわれは死に得じ

父はまづしく病むとても
子はおほらかにそだつべし
おやつの菓子のならねば
豆を煎れかしわが妻よ

（中略）

戀の外には泣かざりし
昔の涙の幼なきよ
子ゆゑ妻ゆゑ母ゆゑに
今の涙の眞とさよ

貧苦にせまりて思ふこと
子供三人母一人
妻とわれとの死顔を
さらさらは如何に月光よ

（中略）

胡蝶の秋のおののくは
やがて別かるる死ゆゑに
われ死にのぞみ怖るるは
愛し子ゆゑに妻ゆゑに

右の手に子供かいたき
左に母の手をひき
割籠もつ妻従ひて
野遊びに興ずまぼろし

（『燭台』昭和2年12月号所収）

吉田常夏 年譜

（提供・和田 健）

明治22（一八八九年）	
明治28（一八九五年）	六歳
明治34（一九〇一年）	一二歳
明治38（一九〇五年）	一六歳
明治42（一九〇九年）	二〇歳
大正2（一九一三年）	二四歳
大正4（一九一五年）	二六歳
大正7（一九一八年）	二九歳
大正12（一九二三年）	三四歳
大正13（一九二四年）	三五歳
昭和2（一九二七年）	三八歳
昭和13（一九三八年）	四九歳
《没後》	
平成10（一九九八年）	

4月25日、東京麹町、武者小路邸内で生まれる。本名義憲。父熊樫（美祿郡真長田村、徳重伊作次男）、山口湯田吉田家の養子に入る。七卿落ちのさい、護衛の土方久元伯を家に泊めた関係で上京し内務省に勤務。翌年、父の死去により母とともに湯田に帰る。

下宇野令小学校（湯田小学校の前身）に入学。恋をする。

山口中学校に進学。二年上級に伊藤理基がいて文学の手ほどきを受ける。

全国誌『文庫』に詩を投じ、河井醉茗に認められる。

中学三年の時、家産傾き家族前後して東京に居を移す。常夏、河井醉茗のもとで一時書生となる。若山牧水・有本芳水らと交わる。詩作に精進。

2月19日、隣家から火が出て類焼にあい、校正中の処女詩集『野火』を焼失、詩作の意欲を失う。

娯楽雑誌『うきよ』の発刊に従事。よく売れ後年の編集者としての才能を磨く。女子文壇社記者、松井静代と結婚。

長女玉緒の誕生により、伊豆大島より帰る。以後、文筆に専念。『勅撰八代恋歌集』、珍書ともいえる恋愛警句集『朱唇秘抄』ほか数々の著書を執筆。

中外商業新報社（現在の日本経済新聞）に入社。

9月1日、関東大震災で、一時一家八人伊藤理基方に避難。

8月1日、関門日日新聞の社会部長、文芸部長となる。

4月24日、関日社会部編集室において執務中、突然脳溢血で倒れる。

同10月、病やや癒えたころ、二青年来たりて雑誌を出す相談を受ける。

『燭台』発刊に踏み切る。5号より全責任を負う形となり、以後、貧困と病苦に耐え刊行を続けたが、昭和7（一九三二）年終刊。

10月29日、北九州小倉の愛人のもとで死去。妻も承知であったという。墓は山口市三和町心清寺、吉田家の墓所に葬る。

同名の『燭台』（隣報社・下関市）より創刊。

回想集『ひとつの流れ』（東京・光風社書店・昭和52年刊）

復刻版『料理小説集』（付吉田静代年譜）（三陽堂出版・平成7年刊）

※回想集・復刻版はともに夫人の吉田静代（平成4年死去・百一歳）が刊行。

吉田常夏